

花岡徳美さん（73歳）は諏訪湖と共に昭和を生きた

平成二六年五月二十九日

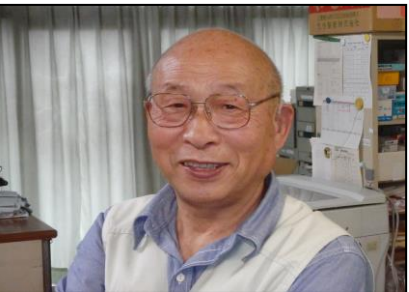
長野県岡谷市 宮坂文利

湊公民館の夜間業務の委託を受けて、宿直業務を行っている花岡徳美さん（七三歳）。

以前から仕事が終わった後に、徳美さんといついつい長話をしてしまう事が多く、これまでも地元の問題や歴史を沢山教えてもらっていた。今回は、そんな徳美さんの話を改めてお聞きした。

岡谷市は、諏訪湖のほとりにあり、明治から昭和の初期にかけて、製糸業で大いに栄えた。その後、小さな町工場を中心に、精密の街として昭和の時代を駆け抜けた。

徳美さんのお父さんもお兄さんも、諏訪湖で漁師の経験があり、岡谷市が製糸業で隆盛を極めた頃には、お父さんは製糸業を行っていた。また、徳美さん自身が町工場を運営されていた経験もある。



仕事終わりの夕方から、時間をとり、いつもの雑談と少しだけ雰囲気が違う、徳美さんの歴史を聞く旅に出発。

【今の支所の場所には小学校があった】  
「俺は生まれも育ちも湊。今の支所がある場所に、小学校があつて、通っていた。」

「今の小学校は諏訪湖を埋め立てた場所に建て直したもの。旧道の向こうはみんな諏訪湖だった。」

「今の小学校の生徒は、一学年が二十人くらいでひとクラスだけど昔はふたクラスで、もっと大勢いたもんだ。」

【父がやっていた製糸工場】  
「昔は湊だけでも三十くらいの工場があつた。親父も製糸を始めて、工場をこしらえた。」

「多い時で二十二人の工女さんが居て、茹でたマユから糸を採って、わくに移す作業、座繰（ざぐり）をやっていた。」

「俺の名前は釜炊きのじいさんが付けてくれたつて。六人兄弟の末っ子。」

#### 【製糸業からの転換】

「なんしろ岡谷だけでも沢山の工場があつたけど、時代の流れでだんだんと工場の合併が進んだ。」

「親父は会社をたたんで、百姓もやってみただけど、合わなくて諏訪湖で漁師になった。」

「ちょうど俺が中学生の頃。今の南中のところに湊中学があつた。湊村が岡谷

市に合併したのはその頃。」

### 【天竜川のつり橋で遊んだ】

諏訪湖を起点とする天竜川のはじまりは、現在は釜口水門がある。かつてはそこにつり橋が架かっていて…。

「天竜橋のところにあったつり橋は揺れて怖かった。子どもの遊び場だったなあ。」

### 【中学を出て働き始めた】

「仕事は色々やったけど家も家具もばんばん作ってた時代だから、建材の会社に入った。」

「その後、いくつか仕事を変えたけど、近所に精密を勧めてくれる人が居て、ちやうど親父の会社の車庫があったもんで、そこで会社を始めた。『馬小屋』とか言われたけど、四年頑張った時に工場を一棟作って、その後また増築して増やしていった。」

「諏訪には大きな精密の会社が多くて、三社くらいの下請けをしていた。最初は女房と二人でやってたけど、仕事も順調になってきて、二人雇って四人でやってた。今思えば、その頃が楽しかったなあ。」

### 【経営者としての緊張感】

「恥ずかしい話で、小切手なんて見たこともなかったけど、その頃に初めて扱った。」

「紙を銀行に持って行って、お金に換えてもらえるんだけど、ある時にいつもと違って約束手形を渡された。銀行に持って行ったら、期日が来ないと下

ろせないと言われて、その日にまた行ってみたら銀行でお金が無いと言う。不渡りか。こりや大変という事で、その会社に行って話をして、『少し待ってくりよ』と言われた。」

「銀行との信頼が崩れたら、お金も借りられなくなる。資金繰りもあるし、従業員にも支払いがあるのにと、ドキドキした。」

「最終的には現金で払ってもらったけど、寸前で会社の倒産に巻き込まれるところだった。」

### 【下請けの弱み「不良は絶対にだめ」】

「大きな企業から仕事をもらって、納品するけど『ロットアウト』と言って一つでも不良品が出れば今まで納めた仕事を全部見直さないといけない。納期が遅れても、罰金と対策書を書かないといけなくて、何遍も書き直させられたりして、そりやあ厳しい。ちやんとやらないと、仕事もらえなくなっちゃうから。だから、どんなに急いでもいい、必ず確認をしていた。」

「知り合いは、納品したものに一個だけ不良があつて、神戸の倉庫まで行って何十台も直したって。」

「ある時、納めた製品に『汚れが見つかった』と、会社から連絡が来て、コンベアに流れているのを一個ずつ拭かされた。」

「ところが、自分のとこの工場の工程で付く汚れは、アルコールで拭かないと絶対に落ちないんだけど、その汚れは乾拭きで落ちた。それに気が付いた時は、本当に嬉しかった。見抜いた自

分も嬉しかった。



『まあいいや』  
でやっている  
会社は、あん  
まり長続きし  
ないね。じき  
に潰れちゃ  
う。』

### 【今は孫がかわいい】

「子どもは二人とも女の子。男だった  
らまた違ったかもしれないけどなあ。」  
「上の子が看護婦になりたいって、病  
院に勤めながら准看護学校に通って、正  
看護婦になるために学校に行った時  
は、毎日送ってあげた。」  
「今は下諏訪に住んで、孫を連れて  
毎日の様に来る。孫は二人とも男の子。  
やる事なす事、なにしろ可愛い。それ  
が年寄りの生き甲斐だね。」

### 【話を聞いてみてゝ所感】

私が徳美さんと知り合って四年目  
になる。

地域の事情に詳しく、地元の方が悩  
んでいる話を直接聞いたり、昔の話や、  
諏訪湖での漁の話の聞いたり。はたま  
た悩みを聞いてもらったり。

今回はこれまで知らなかった徳美  
さんの素顔を沢山見ることが出来た。

聞けば上の娘さんは、奇しくも私と  
同じ年。これからも息子の様な気持ち  
で、沢山話が出来ると嬉しい。

より深く知り合う事の出来た時間  
になった。

### 【精密業の下請けも海外へ】

「新しい仕事を受けると、色々と自分  
でやり方を工夫して、効率よく良いも  
のを作ろうとするけど、その内に本社  
で来て、道具の並び方とか、手順なん  
かを写真で撮って行って、しばらくし  
たら、また新しい仕事が来て、工夫し  
て。という時期があった。」

「そういう仕事は、みんな海外に持つ  
てかれちゃったみたいだな。ちよつと  
した工夫なんかも考えた技術だから、  
ただ持つてかれちゃうと厳しい。」

### 【オンリーワンの技術】

「そんな中でも、俺にしかできない技  
術もあった。伊那の方の会社でずっと  
納めてたけど、いよいよ目も悪くなっ  
てきたので、辞める時には、会社から  
人を呼んで教えてあげた。」

「手順通りにやってもなかなか出来  
なくて、コツを何回か教えてあげると  
出来るようになった。ネジを少し緩め  
るといふ、ちよつとしたコツだけど、  
自分でも上手くいかなくて何回もや  
って出来た事で、これも技術って事な  
んだね。」

